

映画 *THE JOY LUCK CLUB* に見える 中国系移民の姿

佐藤 洋

The Characteristics of Chinese Immigration in the Movie Titled *THE JOY LUCK CLUB*

Hiroshi Sato

Abstract

This research is going to deal with the characteristics of Chinese immigrants. It will make use of the movie titled *THE JOY LUCK CLUB*. This unusually named club is a group of four mothers who enjoy playing mahjong regularly. They have been playing the game for as many as thirty years, since they migrated to San Francisco from China. They eat food or snacks they cook for themselves and chat and gossip while playing. The stories of how they had to emigrate from their home country is told through their chatting. The movie shows that each of the mothers has her own sad background. Another important topic they always discuss is their family stories, especially those of their special daughters.

The movie describes one story after another of how each mother experienced hardship in her younger days in China, and how she is now struggling with new problems related to the generation gap. Their history and struggles are the history and struggles characteristic of Chinese immigration to America. Since other ways of immigrating to America (such as from England, Ireland, or Poland) were analyzed in *Gakuen* No. 798, issued last April, comparison with that analysis and the difference from immigration types of other ethnic groups will be researched. This will reveal the different characteristics as well as similarities of Chinese immigration from that of immigrants from other countries.

はじめに

本稿は、映画に描かれる移民の姿に注目し、『何を求めて人々はアメリカに向かったのか』という事情を映画のストーリーの中から探し、背景や歴史などに照らし合わせて映画を読み解いている論考の続きである。前稿¹⁾では、「一映画に描かれたアメリカに移住する人々の夢」というテーマの下に、3本の映画『ポカホンタス』(*POCAHONTAS*)、『遥かなる大地へ』(*FAR AND AWAY*)、『わが心のボルチモア』(*AVALON*)を取りあげ、これらの映画をどのように読み解いたのか、詳述した。結論的には、「移民を決意させる理由は、時代と共に移っていくが、基本的には経済的理由が一番である。」「そして、まだ本稿で触れられなかったアジア、中近東、南アメリカ等々からの移民が多くの映画のどこかあちこちに映されている。」²⁾とも書いた。そこで本稿では、前に述べられなかった中国系移民を描いた映画を取りあげる。

映画『ジョイ・ラック・クラブ』³⁾は、中国系アメリカ人のエイミ・タン (Amy Tan) の書いた長編小説⁴⁾を下敷きにして、中国系移民の現代の生き方を描いて注目を集めた作品である。本稿では、この映画の中でどのような彼らの姿が描かれ、それは彼らだけが歩いてきた特異な道なのか、それと

も他の移民と共通する要素を持っているのかなどについて、比較、検討をしていきたい。

1 THE JOY LUCK CLUB は、こんな映画

この映画のあら筋は、冒頭に一葉の白鳥の羽が画面一杯に映し出され、それに重なって流れるエピグラフ（題辞）のナレーションによく示されている。——“老女は昔シャンハイ（上海）で、元はアヒルで、ガチョウになりたいと首を伸ばしていると白鳥になったという、高価な白鳥を買った。やがてその女と鳥は大洋を越え、アメリカに渡った。女はそこで「アメリカで私に似た娘を生むわ」[In America I will have a daughter just like me.]³⁾と鳥に言った。さらに、完璧なアメリカ英語を学ばせ、いつも満腹で悲しみの入る余地がないように育てると言った。「自らが望む以上のものになった白鳥を与え、母の思いを伝えよう。私の願いと共に遠くから渡ってきたのだから」[She will know my meaning because I will give her this swan... a creature that became more than what was hoped for.]”——

ここには、中国から渡ってきた母の、自分の味わってきた不自由を子供には繰り返させないで、立派な子供に成長して欲しい、アメリカ人になって欲しいという親としての願いが吐露されている。映画はこの題辞を基調にして、母親がどうしてサンフランシスコに渡ってきて、娘をどう育て上げ、成長した娘とどのような関係になっているかを映し出していく。スーユアン（随願）と娘ジンメイ（Jing-mei）、リンド（領弟）と娘ウェヴァリー（Waverly）、アンメイ（顔媚）と娘ローズ（Rose）、そしてインイン（蛍蛍）と娘リーナ（Lena）の四組の母子のことである。

ジョイ・ラック・クラブという面白い名称のクラブは、移民としてやってきて、サンフランシスコに在住するこの4人の母親たちが、毎週開いてきたマージャン（麻雀）の会の名前である。彼女たちは、チャイナタウンの教会で知り合い、30年にわたって麻雀卓を囲み、おしゃべりをし、食事をつまみながら、自分の幸運を願うのを無上の喜びとして続けてきた。しかし、4カ月前にメンバーの一人でクラブの主唱者であった、スーユアンが病気で亡くなった。今日は、新しいメンバーとして、亡くなった母親の代わりに、娘のジンメイが新たに麻雀の会に加わる記念すべき日だった。これに合わせて、メンバーの夫たち、子供たち、孫たちも集まって、盛大なパーティーが開かれている最中であった。集まっている人の中には、ジンメイと同じ年頃の娘も来ている。ジンメイは、ずっと年上の母の古くからの友人に混じって牌を動かすのは、いささか緊張と不安に襲われる。牌を動かしながら交わされる話題が、亡くなった母の思い出に集まり始めていくうちに、画面はジンメイの幼少時代の回想へと移っていく。

映画は、4人の母親たちとその娘たち4人が、過去と現在の時間に中国系移民としてどのように生きてきたかを、一人ずつの回想を交えた物語で描くように構成されている。4人の母親たちは、そろって中国では辛く、耐え難い苦勞をしてきた。

まず、スーユアンの物語が始まる。彼女は日中戦争中に夫に先立たれ、双子の乳児の娘を避難の途中で置き去りにしなければならなかった。彼女はこのことに母親としての負い目と深い傷をずっと抱えていた。

娘のジンメイは母の苦しみを知りつつも母には素直になれなかった。自分の少女時代に味わったピアノ発表会での無惨な失敗の屈辱に、いつも押し潰されそうになっている。小さな頃からのライバル、リンドの娘ウェヴァリーは天才的なチェス選手として評判であった。ジンメイは完璧なピアノ演奏で、

彼女の鼻をへし折って見返してやりたいと企んでいた。ところが結果は、全く逆になってしまった。演奏途中から、ひどいミスタッチの連続で、音楽なんていうものには全くならなかった。

他方、ウェヴァリーはいつまでもチェスの天才でいることも、母の言いなりになっていることもできなかつた。娘の天才振りを誰彼なしに自慢する母リンドをうっとうしく感じるようになり、反抗をするようになった。すると、彼女の才は消え、もう試合で勝つこともできなくなつた。そして、彼女はチェスを捨てた。

一方、母リンドは、ほんの4歳の幼児であつたというのに、金持ちの家に身売りを約束され、将来の夫になる少年ティエンユーのところに、まだあどけない15歳で嫁がされた。男の子を産むだけの少女としていじめられた。遂に我慢ならず、自分でデッチあげた災いの迷信をふりまいて、家を追い出されるように仕組み、見事に成功し、上海行き切符を手にした。しかし、リンドはその時の屈辱をぬぐい去ることはできないでいる。

アンメイにも耐え難い記憶があつた。彼女の母は、高名な学者の夫を早く亡くし、寡婦の弱みにつけ込まれて、実業家ウーチンの第四番目の夫人の身に甘んじなければならなかつた。恥ずかしい身分に落ちた母に対して身内は冷淡で、娘のアンメイは母に会わせてもらえなかつた。しかし、アンメイの祖母ポーポーが死の床にいる時、アンメイの母は娘の最後の義務として、自分の腕から肉片をナイフで切り取って、血と共にスープの中に溶かし、大病の回復を願って実母に飲ませた。けれども、その甲斐はなかつた。祖母の死後、アンメイはウーチンの家で母と暮らし始め、妾同士のみにくい争いを目撃しながら、母が生きる望みを失っていく姿を傍観するのが精一杯だつた。ある日、母はアヘンを大量に飲み込んで自殺をした、娘のアンメイに望みを全て託して。それから、残された娘はウーチンの家を出て、上海経由でアメリカに向つた。

アンメイの娘ローズは、大手出版社社長を父親に持つテッド (Ted) と種々の困難を乗り越えて結婚したはずなのに、15年間の生活に終止符を打とうとしている。ローズは、アンメイの母親が娘に教えた自己犠牲の精神、「自分は何も望まず — 人の不幸をのみ込んで — その逆に娘を育てたはずなのに —」 [I was taught to desire nothing ... to swallow other people's misery ... and to eat my own bitterness. And even though I taught my daughter the opposite, ... but still she came out the same way.] 彼女自身にも、ましてやアンメイにもどうすることもできなかつた。ただ崩壊を待つばかりの状態である。

インインも中国には辛い思いしか残っていなかつた。16歳で最初の夫と出会い、結婚。1年後には夫は家庭を省みず、愛人と暮らす生活をし始め、夫婦の崩壊に突き進んだ。孤独と失望の中で産み育てた男の子を、浴槽の水に沈めてしまった。幼児殺しを犯してしまった罪悪感、夫との不毛な衝突に疲れ果て、何もかも捨てた時に、彼女もまた、サンフランシスコに渡つてきていた。

4人の母親たちの中国に残された辛い記憶と、それぞれの娘たちがアメリカで生まれ育つて、母親たちの期待に応えようとする娘たちの思いが、麻雀卓の座席をぐるりと一巡する。しかし、それぞれの母娘の間に起こつてきたことは、全くのすれ違ひの記憶ばかりである。「ママはいつも最高のものを求めた。娘にも同じ高い期待を寄せた…私に何を望もうとこれ以上の私にはなれない。なのにママは本当の私を見ようとしなない」 [Because every time you hoped for something I couldn't deliver, it hurt ... And no matter what you hope for, I'll never be more than what I am. And you never see that! What I really am.] というジンメイの言葉は、母親と自分との間に置かれたジレンマをよく表す台詞

となっている。

この越えがたいすれ違いを一挙に取り除く切っ掛けは、ジンメイの母スーユアンが消息を探し続けていた双子の姉2人が生き延びていたと知り、ジンメイが双子の姉に会うために中国に出掛けることであった。「私たち皆の愛を中国に運んで」[Well, take all of this love with you to China tonight.]という亡くなった母の期待を抱えて、ジンメイは旅立つ。そして、出迎えた2人の姉の姿を認めると、「子供に望みを託さない母親などない」[Mother can never give up her hope for her own children ... she transfer all her hope to you all ... hope from those babies.]という父の言葉が心に響き、「やっと母の期待にそえた。真の自分を見いだし——母が抱き続けた望みを見いだしたのだから」[... and I'd finally done something for her. I'd found the best of myself ... what she kept for all of us: her long-cherished wish.]というエピローグと共に、エピグラフの羽と重なり合い、心が響きあっていることを暗示する。そして、ついに母との和解の手掛かりを見つけたように感じる。4人の娘たちも、和解の道を探ろうと歩み始めるところで、映画は終わる。

2 何が見えてくるか

四組の母親とその娘たちの回想から、この映画が大きく描いていることは、まず移民一世の母親たちが中国で受けた辛い体験、そして祖国を後にした経緯についてである。次は、娘たち移民二世がアメリカで生まれ、アメリカ人として育ったために身につけた価値観が、一世である親たちのそれと相違するために起こる、お互いの齟齬と軋轢である。

前者の、母親たちが母国を後にする原因については、十分明確にされていない。なぜなら、双子の娘を見殺しにしてしまったかも知れないという罪悪感と負い目、身売り同然の扱いを受け、人格破壊を強制されるような屈辱、絶望のあまりに我が子を殺してしまう罪悪感、妾の母の受けた侮辱と自殺など、母親の中国での生き方が描かれてはいるけれども、それらがどうして移民としてサンフランシスコに渡る原因にまでなるのか、筋として熟成されていないからである。そのために、移民を決意させるはっきりとした原因を知る手掛かりが少ない。しかし、母親たちが育った中国には、因習、伝統、身分制度等にしばられ、仏教、儒教、道教、風水などの精神世界、そして貧困や無知などの環境も加わり、女性が自分の意志で行動を起こす余地などほとんどないのだという状況はよく映し出されている。だから、4人の母親がアメリカに渡ろうと決意したのは、何にも縛られない自由が欲しいと望んだためであろうと推測される。「自由の国アメリカ」への憧れと獲得への行動である。⁵⁾

そして、彼女らは新世界で生活を始め、娘を生み、育て、祖国では考えられなかった親の望みを子供に託す。母親スーユアンはジンメイを天才ピアニストに、リンドはウェヴァリーをチェスの天才プレーヤーに育てようと、娘たちに一生懸命であった。しかし、母親は生まれ育った母国の風俗・習慣と母国語から完全に自由ではなかった。時には母国のままであることもあった。

ジンメイが9歳の頃、ピアノに夢中になって、母親の期待に応えようと練習に精を出していた時のこと、母から「お皿を洗って」と頼まれたが、言われた通りにしなかったので2人で口論になってしまった。母親の強制的な態度に反感を持っていたジンメイは、「ここは中国じゃないわ。私は自由よ」[I'm not your slave. This isn't China.]と口走ってしまう。母スーユアンの、娘に手伝いをさせて当たり前と考えている常識には、身分の上下関係に基づく中国の伝統的習慣、あるいは儒教的考え方が深く影響しているように思われる。反対に、娘の反論は我が儘な発言ではありながら、アメリカ人の

中で育った自由主義の発想である。また、リンドは幼い頃の娘の耳を見て、「私と違って福耳だわ。私より幸せになれる」[You're so lucky. You don't have ears like mine. You'll have a better life!]と云う。インインは娘夫婦の寝室にいて、ベッドと鏡の位置が風水の方角に合わないと言って、鏡を1枚立てかける。ウェヴァリーは母リンドに夕食の席に招かれ、新しい恋人を紹介すべくリッチを同伴したが、リンドが自分の作った料理を謙遜して、「味がうすくてもの足りないかも」[This dish not salty enough.]と言ったことを言葉通りに理解し、彼は塩と醤油を上からかけてしまう。リンドは、中国流にお客から褒めちぎりの返答を期待して言ったはずなのに、彼は謙遜の礼儀を全く理解していないと落胆する。

これらの描写から伝わってくることは、移民一世の母たちは母国を後にしたのだから、祖国の伝統習慣、言葉を含めた文化から隔絶してしまうだろうと思われがちであるのに反して、彼らは捨てたはずの国の文化を生活や生き方の大きな拠り所に行っているということである。礼節を尊ぶ躰、謙讓の美德、風水の占い、迷信、中国語などが中国人移民のコミュニティーに生き残り、第二世代の家庭教育に使われる。しかし、第二世代はアメリカで生まれ、アメリカで教育も受けているので、アングロ・サクソンの価値観を基本とする外部世界と深くつながっており、学校、地域、雑多な移民の子孫などとの交流を通して、アメリカ社会の主流派(mainstream)に溶け込んでいく。彼らは世間に交われば交わるほど、母親からは距離が離れていく。ジンメイが母親に向かって、「ここは中国じゃないわ。私は自由よ」と口走ってしまう苛立ちは、第二世代が経験する特有の苦悩なのである。母親は半分中国とつながっているのに、第二世代は本当の中国人でもない、アメリカ社会の主流派でもない、娘たちの曖昧なアイデンティティは、母親にはなかなか理解してもらえない。

この映画では、ローズとテッドの恋愛関係の中で、人種間の微妙な問題をオブラートにくるんで次のように提示している。ローズは学生時代に、大手出版社の社長を勤める父とワインの醸造元の令嬢育ちの母とを持つテッドと知り合った。彼は、ローズを両親に紹介することも兼ねて、親の開いたガーデン・ワイン・パーティーに出かけていった。ローズがパーティーを見回していると、彼の母親がやってきて、「…うちの家庭はリベラルだけど…テッドは父親の会社を継ぎ——価値感の異なる世界に入る。出版関係者に作家、批評家たち。(彼らは)私たちほど心が広くない」[I want you to know, Rose, that we're a very liberal family ... and we know several very charming Oriental people. It's just that Ted is going to be working ... with his father in the company, and, he's going to be judged by people of a different standard: publishers, authors, critics and the wives. And they won't be as understanding as we are.]と、母親がローズに告げた。これに対しローズは「奥様、私はテッドとは別に結婚する気など…」[Mrs. Jordan, you sound as if Ted and I are getting married. That's hardly the case.]と答えた。「分かってるわ。でもこういう世の中で——ベトナムはあの状態だし…」[Oh, I know, dear, it's just that the way the world is. How unpopular Vietnam was.]と母親が言う。「でも私はアメリカ人です」[I'm not Vietnamese. I'm American.]とローズは答えるのが精一杯だった。

テッドの母は、ローズに話を始める前に、「私の話を誤解しないでね」[So I hope you won't misunderstand ... what I have to say.]と、前置きを述べている。しかし、言い訳の前口上であることは、リベラルという単語の持つ意味と彼女の意見とが全く矛盾していることで分かる。母親の発言の裏には、言い繕おうとする言葉のすき間から、中国人あるいは東洋人に対する彼女の無意識な偏見

が、こぼれ出てしまっているのである。彼女のアングロ・サクソンの価値観で、どのように中国人や東洋人を排除しようとしてきたか、その歴史を遡って、彼女のリベラル性を質してみよう。

3 移民の始まりから中国人排斥法、そして制限撤廃までの中国系移民の歴史⁶⁾

中国人がアメリカに移住し始めたのは、合衆国政府の記録文書によれば 1820 年からだが、1849 年にカルフォルニアで空前絶後のゴールド・ラッシュが起きる前までは、その人数は 1 千人にも満たなかったという。しかし、金鉱がシエラ・ネバダ山中で発見されたという大事件は、中国からの移民をカルフォルニアに吸い寄せ、加速させた。1852 年には 2 万 5 千人に上り、80 年には 10 万 5 千人にまで急増している。ところが、中国人の請け負った仕事は、最初は金鉱採掘の仕事ではなかった。金発見のニュースが伝わると、カルフォルニアの町々から人々の姿が消え、都市部では労働力不足になった。彼らがその仕事を補ったのだ。その後、後続の中国人移民は山中に入り、白人鉱夫相手のコックや洗濯屋などの仕事を請け負ったり、放棄された廃鉱で金採掘を行ったりした。そして、1882 年までに中国人移民の総数は約 34 万人にも達した。

中国人移民がこのように急増した原因は、ゴールド・ラッシュだけのせいではなかった。1863 年に着工された大陸横断鉄道建設⁷⁾が突貫工事で進められ、大勢の安い労働者を必要とし、多くの中国人がそれに従事しようとしてきたからだ。横断鉄道は、西端のカルフォルニア州サクラメントから東に向かうセントラル・パシフィック鉄道と、反対側の東端ネブラスカ州オマハから西に延びてくるユニオン・パシフィック鉄道とが接合する、総延長 2,860 キロの鉄道である。東に向かうセントラル・パシフィック鉄道の敷設工事は、シエラ・ネバダ山脈に阻まれ、険しい谷、トンネル工事、厳しい冬などを克服しなければなかった。この鉄道の工事には 1 万人の労働者が従事し、その内 9 割が中国人労働者であった。それに対し、西へ延びてくるユニオン・パシフィック鉄道は、中西部の平原地帯を横断して線路敷設を続けるので、アメリカ先住民の領地を通ることになってしまった。先住民たちにとって鉄道は、彼らの生活必需品のアメリカ・バイソンが棲息する場を荒らすことになり、死活問題だった。そのため、鉄道会社や工事関係者との衝突や紛争が続いた。この路線の工事には多くのアイルランド移民と南北戦争の退役軍人らが従事した。どちらの工事にしても、危険で過酷な働き口だったが、白人労働者が 1 日 1 ドルから 3 ドルの日当に対し、中国人には 3 分の 1 以下の低賃金しか支払われなかった。中国人の中には、食事も宿舎の手配もしてもらえなかったという記録もある。彼らが過酷で困難な仕事を低賃金で担当したので、鉄道会社にとっては好都合な労働者であったということだ。ところが、低賃金でも忍耐強く働く彼ら中国人の働き振りが、かえって人種偏見と白人労働者との紛争を生み出す原因となった。

中国人移民の祖国清国は、18 世紀後半からヨーロッパ列強諸国から植民地化政策の攻撃に晒され、1840 年にはアヘン戦争を仕掛けられ、領土の一部をイギリスに割譲しなければならない苦境に陥れた。このため、治世は乱れ、国民の多くは重税に苦しめられ、貧民化し、飢餓線上をさまよっている状態だった。アメリカに移住して生活の活路を見いだそうとした中国人にとっては、たとえ鉄道建設労働の賃金が低く、厳しい労働だとしても、糊口をしのげれば良かったのだ。そして、移民のほとんどが中国南東部にあたる広東地域出身の、職業的に無熟練者で、教育も受けていない年若い男子だった。

一方のアイルランド人の移民にも、この工事に集まる理由があった。この当時のアイルランドは、

1840年代後半に起こったジャガイモの病気による飢饉で、多数の餓死者が出て、農業は壊滅的被害を受けた。そのため、祖国を捨て、アメリカに移住する人が絶えなかった。⁸⁾しかし、新しく渡ってきたアメリカで彼らに残されている仕事は、既に先に渡ってきた移民がしたがない、過酷で辛い低賃金の職でしかなかった。ユニオン・パシフィック鉄道の線路敷設工事は、まさにそのような働き口であったわけである。⁹⁾完成を急ぐ会社と難儀を極める工事から、多数の犠牲者が出るのは必然であった。そのため、この横断鉄道の多大な犠牲については、「この鉄道の枕木の下には中国人が一人ずつ埋まっている」と言われる。また、同じ文言の「中国人」を「アイルランド人」と言い換えられることもある。ということは、この突貫工事にはこれら2つの国の移民が深く関わっていたことを物語っているということである。

鉄道が1869年に接続すると、工事労働者は失業し、新しい職を探さなければならなかった。すると、中国人とアイルランド人、退役軍人たちがばかりでなく、鉄道の開通によって東部から仕事を求めて新しく流入するヨーロッパからの未熟練労働者も加わって、仕事の争奪戦が激化し、その中から中国人排斥の気運が生まれた。彼らヨーロッパ系の人々は白人中心主義を信じて、アメリカは白人のものであるから、土地も仕事もカルフォルニアの金も当然白人のものであると考えていた。だから、彼らは、多くの中国系移民が中国服を着て、髪を長く伸ばし、後ろで束ねる弁髪を結び上げ、キリスト教信者でもない、明らかにヨーロッパ系の人々とは異質な文化習慣を守る中国人を、異邦人と考えた。そして、不熟練で単純労働の職種を担当する白人労働者層、特にアイルランドからの移民には、中国系移民が相変わらず辛抱強く、悪条件にも耐え、低賃金でも文句も言わずに働き、雇用者側には有利な労働力を提供するので、仕事を奪い合う敵であった。1870年代後半の経済不況が起きると、争奪戦はさらに過激化し、白人未熟練労働者たちは、太平洋沿岸地域の都市に固まって住む中国人に対する襲撃、暴動を起こすようになった。彼らは白人社会の中で下層階級の移民あるいは子孫として蔑まれながらも、白人優越主義にかろうじて引っ掛かっていることを拠り所に、中国人を人間と思わず、撲殺したり、殺傷したりしてきた。同時に、町を動かし、中国人に対する人種偏見を誘導し、州に訴え、大統領に詰め寄り、1880年に「中国移民取締条約」を清国と調印させ、移民を制限させることに成功した。一方、中国人移民は、度重なる暴行、襲撃、破壊行為から自分たちを護るために、集団で住める町を造った。サンフランシスコのチャイナタウンはその一つで、現在でもアメリカ最大の中国系住民の町として発展している。

続いて1882年には、中国人の移民を一切禁止する「中国人排斥法」(The Chinese Exclusion Act)を成立させてしまった。この法令は、米国史上初めての移民禁止法令となり、中国からの移民の禁止ばかりでなく、移民として来た者も一度出国すると再入国も許されなくなった。これにより、全く孤立した中国人移民社会が出来上がってしまった。このために極端な女性不足が起こったので、人口も1920年代までどんどん減少していった。この中国系移民の禁止措置は日系移民、さらに拡大して全東洋人に対しての禁止となった。(しかし、フィリピン人は、アメリカ自治領であったので、この制限からは除かれた。)移民禁止がようやく全面的に解かれたのは1965年に制定された「1965年移民法」(The Immigration and Nationality Services Act of 1965)によってであった。

4 中国系移民一世は、始まりが違い、二世からは同じような道をたどる

ローズが体験するテッドの母親からの隠微な人種による優劣の差別は、多くはアメリカに移民をし

てきた順番によって決められる原則によった。新しい移民は、前の移民たちの下に潜り込むことになり、下で支えていたその民族か人種が少し押し上げられ、上の層はさらに上にいくという上昇現象を続けてきたからである。¹⁰⁾ (しかし、ここでもアフリカ系人種は除外されていた。)

テッドの母親の言葉に隠れている東洋系人種に対する意識“私たちは心が広いけれど、息子のテッドが中国(ベトナム)系移民の娘と結婚するのは止めて欲しい”という本音は、前章で述べた19世紀末に起きた東洋人全体に対しての排除の観念に通底する。中国系移民が、法律上初めて禁止されたことは、その当時に白人中心主義を信奉する人々が、中国系に対する嫌悪と憎悪をどれほど激しくいただいていたかを物語っている。そして、反面どれだけ中国系の人々の力を恐れていたかの裏返しでもあっただろう。白人優越主義が醸し出す‘下等人種’としての東洋人像が見え隠れしているからである。さすがに、1960年代の黒人を中心とした公民権獲得運動の成果で、公然と人種差別を口にすること、態度に表すことははばかれるようになった。けれども、差別的処遇や発言はより巧妙になっていく。この母親とローズの出会いと言葉のやり取りは、長く重たい人種による優越と劣等の歴史の枷^{かせ}を2人とも引きずっていることをよく描いている。

中国人移民二世の娘たちは、一方で母親たちが母国で体験してきた悲惨で辛い日々のことを何かにつけ教えられ、親たちの苦労を繰り返さないために、人一倍の努力をするように親から強いられてきた。母親から伝えられることは、母国の伝統・文化を色濃く反映したものが多かった。例えば、母スーユアンがジンメイに残した生前の教訓は、自宅で開いた蟹料理のパーティーで伝えられた。「皆もウェヴァリーもいい蟹をとったけれど、お前だけは味の落ちていた蟹をとった。それは心が美しいからよ」[Everybody else want best quality. Waverly took ... You took worst. Because you have best-quality heart.]と、スーユアンは娘を褒める。「教わっても持てないものよ。生まれつきだから」[You have style. No one can teach. Must be born this way.]とも付け加え、儒教的謙譲の美德を教えている。

しかし、娘たちはもう一方ではアメリカ社会の主流派と競争しなければならない。その典型が、ローズとテッドの恋愛関係に現れていることは、既に述べた通りである。リーナと中国系の夫ハロルドの夫婦は、一切の出費を厳密に二分して、2人の自立と平等の精神を保とうと努力する。リーナは子供の時にアイスクリームを食べ過ぎて、以来食べられなくなっていたが、夫ハロルドはそれには気付かないで、アイスクリーム代はそれでも夫婦で折半をしている。母親のインインがある日冷蔵庫のレシートの束を見て、その妙な勘定のやり方を指摘し、娘のアイスクリームの件を夫婦の前で暴露してしまう。これを契機に、自立と平等がアメリカ人らしいと信じている夫婦は「物を置けないテーブル」みたいに不安定[not too sturdy]で、「近づく不幸の兆しが見えた。この家はやがて崩壊する」[All around this house, I see the signs. This is a house that will break into pieces.]ことを母は予知する。

4人の母親たちは、娘たちが移民一世の味わってきた辛酸を分かっていないと嘆き、娘たちが彼女らの手の届かない世界に住み始めていると懸念をする。娘たちは、自分たちが本当のアメリカ人として見られていないのではないかという不安と自信のなさに苦しみ、中国人でもないし、アメリカ人でもない自分のアイデンティティに対し、自分探しに悩んでいる。この原因をつくったのは彼らの母親たちで、親たちのどのような事情であれ、娘たちは結果を受け入れるしかない。娘たちができることは、その起きてしまった結果から出発するしかないのである。移民第一世代と第二世代とはアメリカにいるという事実の出発点が全然違うので、両者に食い違いが起こるのは当然と言わざるをえない。

おわりに

このような移民の世代間による齟齬は、この映画に限らず、『わが心のボルチモア』の中でも、息子が名字を改名して、東欧系の響きを消す行為に見つけることができる。¹¹⁾「名字から人種や出身地域などを特定されないようにアメリカ社会に同化し、アメリカ人に成りきろうとする証と理解される。」けれども、親の第一世代からは、「何をやっているんだ！」という非難になる。軋轢の種は尽きないのである。そして、『ジョイ・ラック・クラブ』は、移民の世代間の軋轢に焦点を当ててはいるが、親の世代と子供の世代に横たわる現代の抱える人間関係の不安定さへと、普遍的主題をさらに追究している。そのため、前稿に取りあげた3作の映画作品よりも、移民の目的や移民の同化意欲と努力を描こうとする画面が少なく、人間関係を描く場面、その危うさを浮き彫りにする印象が強い。しかしながら、『ジョイ・ラック・クラブ』には、移民の歴史と照らし合わせれば、母親たち、その娘たちが背負ってきた人種的枷の何であるかを十分に理解できる画面にあふれている。

註

- 1) 『学苑』798号(平成19年4月号)124-136頁
- 2) 同上 136頁
- 3) 『ジョイ・ラック・クラブ』(THE JOY LUCK CLUB) ブエナ ビスタ ホーム エンターテイメント発売 ウェイン・ワン監督 エイミ・タン原作 エイミ・タン、ロナルド・バス脚本 1993年作 DVD 映画の日本語字幕と英語字幕は、DVDの字幕を参照し、一部修正を加えて引用した。
- 4) THE JOY LUCK CLUB by Amy Tan, Published in Penguin Books 1989
『ジョイ・ラック・クラブ』エイミ・タン著 小沢 瑞穂訳 角川文庫 平成4年
- 5) 自由の獲得のためにアメリカ行きを決意する女性の姿は、『遙かなる大地へ』のシャノンにも共通している。「その土地で馬を育てて自由に駆け回って生きるの……」註1) 130頁
- 6) 中国系移民については、次の資料を参照した。
『「民族」で読むアメリカ』野村 達朗著 講談社現代新書 1992年 117-133頁
NO NAME WOMAN: Four Chinese American Woman Writers Edited with Notes by Teruyo Ueki, Fukuko Kobayashi, NAN'UN-DO 1994 82-83頁
http://en.wikipedia.org/wiki/Chinese_immigration_to_the_United_States 1/10/2008 アクセス
<http://cpr.org/Museum/index.html#Construction> 1/10/2008 アクセス
- 7) 大陸横断鉄道(Union PacificとCentral Pacific Railroad)については、次の書物を参照した。
『アメリカ歴史の旅』猿谷 要著 朝日選書 1997年 99-104頁
『西部開拓史』猿谷 要著 岩波新書 1982年 157-164頁
『物語 アメリカの歴史』猿谷 要著 中公新書 1991年 106-113頁
『排日の歴史』岩槻 泰雄著 中公新書 1972年 11-23頁
- 8) 彼らの移民事情についても、註1) 132頁に触れてある。
- 9) 『遙かなる大地へ』の中でも、ジョーゼフが鉄道工事で働く場面がある。ただし、年代に合わせると、ユニオン・パシフィック鉄道ではない。
- 10) 『「民族」で読むアメリカ』108頁
- 11) 註1) 135頁

(さとう ひろし 英語コミュニケーション学科)